講座

資本論の研究

第4巻

資本論の分析

(3)

青木書店

編集顧問
小林　昇　立教大学教授
富塚　良三　中央大学教授
渡辺源次郎　福島大学教授
編集委員
相沢　与一　福島大学教授
市川　佳宏　福島大学助教授
下平尾　勲　福島大学教授
中川　弘　福島大学助教授
真木　実彦　福島大学教授
吉原　泰助　福島大学教授
米田　康彦　福島大学教授
本巻執筆者
米田　康彦
下平尾　勲
飯島　充男　福島大学助教授
吉村　仁作　福島大学助教授
珠玖　拓治　福島大学助教授
相沢　与一
伊藤　宏之　福島大学助教授
松井　秀親　福島大学教授
小島　定　福島大学助教授

講座・資本論の研究　第4巻

1980年11月1日　第1版第1刷印刷
1980年11月15日　第1版第1刷発行　定価 2000円

編者　下平尾　勲
発行者　山根　襄

発行所　株式会社　青木書店
東京都千代田区神田神保町1-60
振替口座・東京 8-36582
電話・東京（292）0481（代表）
郵便番号 101

(分)3333(製)4489(出)0015　柳沢印刷・黒岩大光堂
©Isao Shimohirao, 1980

凡 例

本巻では使用頻度の高い文献を次のように略記した。なお、原文ページは訳本より容易に検索できるので、特殊な場合を除き省略した。

GR——Karl Marx, *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie.* (*Rohentwurf*) 1857–58, Anhang 1850–1859. Dietz Verlag, Berlin, 1953.『経済学批判要綱』高木幸二郎監訳、全5冊、大月書店、一九五八—一九六〇年。

K初版——Karl Marx, *Das Kapital. Kritik der politischen Ökonomie.* Erster Band, Buch 1, Verlag von Otto Meissner, 1867, Nachdruck der Aoki-Shoten, 1959.『資本論第一巻初版』岡崎次郎訳、国民文庫、一九七六年、大月書店。

K——Karl Marx, *Das Kapital. Kritik der politischen Ökonomie.* 3 Bände, In : Marx/Engels, *Werke,* Bd. 23–25, Dietz Verlag, Berlin, 1962–64, Dito, Dietz Verlag, Berlin, 1947 (*Institut-Ausgabe*).『資本論』全3巻、長谷部文雄訳、青木書店、一九五四年、『全集』第23—25巻、大月書店、一九六五—六七年。(I～IIIは巻の番号、初めのページは青木版、あとのページは大月版)。

ME全集——Marx/Engels, *Werke,* Dietz Verlag, Berlin.『マルクス＝エンゲルス全集』大月書店版。

L全集——В. И. Ленин, Полное Собрание Сочинений, том 1–55, Издатель из Институт Марксизма-Ленинизма при ЦК КПСС, 5-ое изд. Москва, Изд. политической литературы, 1962–70.『レーニン全集』第4版、大月書店版。

目次

序章　総過程＝分肢的生産関係の分析と
その一層の展開……下平尾　勲　3

第一編　利潤・利子・地代――展開、世界市場

Ⅰ　内的諸矛盾の隠蔽としての価格・利潤……米田　康彦　12

はじめに……12

一　利潤論の理論的構造……15

二　利潤論の構成……22

1　剰余価値の利潤への転化……24

2　利潤の平均利潤への転化……27

3　商業資本……37

三　利潤論における競争の意義と限度……40

Ⅱ　資本の蓄積と信用制度……下平尾　勲　49

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一 はじめに……49
二 資本主義的生産様式と信用制度との一般的な関係……53
三 信用制度の成立……57
1 イングランド銀行の成立の背景……57
2 信用制度の基礎……60
四 信用制度の発展……68
1 好況と資本の競争……68
2 好況と信用取引……71
3 資本の蓄積と信用……74
4 資本の配分と信用……79
五 信用制度の限界……81
1 過剰生産と信用……81
2 金の流出と信用……83
Ⅲ 土地所有の独占と絶対地代……飯島 充男 87
一 課題の限定……87
二 土地所有の独占と最劣等地における地代の形成……94

1 レーニンの絶対地代把握……94
2 独占価格と地代との関連——日高氏の絶対地代形成論批判……96
3 農産物需給の一応の均衡下での絶対地代の成立——土地市場の不均衡……102
三 絶対地代の源泉・上限問題——絶対地代論の理論的位置……110
1 絶対地代概念の広がり……110
2 土地所有の独占の制約された表現としての（第四五章）絶対地代……112
3 既耕地追加投資による絶対地代の上限論——日高氏の所説の検討……116
四 むすびにかえて……120
1 以上の要約……120
2 残された課題……121
補論1 土地所有の史的展開——土地把握表示の三形態について——……吉村仁作 124
一 はじめに……124

1 問題の所在……124
2 宛米制の成立……125
二 地主による土地把握表示の形態について……128
1 散田米（＝「散田小作」）……128
2 俵田渡り……131
三 庄内藩における土地問題……137
四 おわりに……144
Ⅳ 『資本論』における世界市場論……珠玖拓治 146
一 はじめに……146
二 世界貨幣論と世界市場……149
1 「商品・貨幣」範疇の展開と世界市場……150
2 世界貨幣の概念……152
3 世界市場と生産諸様式……156
三 資本制的生産様式の環境＝外部市場としての世界市場……158
1 資本関係の世界史的性格およびその基礎……158
2 剰余価値生産・利潤率上昇と世界市場……160

3 「土地所有、賃労働」と世界市場……168
四 国家に媒介された世界市場……174
1 「プラン」と国家範疇……174
2 外国貿易と資本の文明化作用論……178
五 世界市場の歴史的性格……181
六 おわりに……187

第二編 階級闘争と国家

V 資本主義的な生産と蓄積における労働者階級の主体形成……相沢与一 190
一 はじめに——労働者階級の形成と労働力商品範疇の確立……190
二 生産と資本蓄積における労働者階級の「貧困化」と主体形成……194
1 機械制大工業における労働の社会化の諸作用……194
2 資本蓄積における労働者「貧困化」と主体形成……207
三 労働者階級の団結と階級闘争をつうじての発達——労働組合と制度闘争……217

Ⅵ　階級および階級闘争……伊藤宏之　222
——その政治経済学的基礎についての覚え書——
一　問題の提起——課題と方法……222
二　歴史認識の基礎学＝経済学……229
三　「労働日」をめぐる階級闘争……241
四　『国家と革命』と『資本論』……247

Ⅶ　国家の死滅……松井秀親　259
——『国家と革命』第五章・覚え書——
一　共産主義社会における国家の死滅……259
二　「共産主義の発展」と国家の死滅……267
三　問題(1)——いわゆる「過渡期の国家」について……274
四　問題(2)——共産主義社会の第一段階からその高い段階への移行……288

補論2　ロシアの変革とレーニン理論……小島定　297
——「アメリカ型の道」と「ネップ」——
一　はじめに……297

二 「アメリカ型の道」の構成 …… 298
1 農民的土地革命の思想と土地国有論 …… 299
2 「ナロードニキ的＝民主主義的資本主義」 …… 304
3 労農同盟論とプロレタリアートの陶冶 …… 306
三 社会主義的土地国有論 …… 308
四 ネップ論 …… 311
1 問題の所在 …… 311
2 地域的経済流通＝「全一体」の構想 …… 313
3 電化論 …… 316
4 協同組合論 …… 317
5 文化革命論 …… 320
五 おわりに …… 322
あとがき …… 下平尾勲 324

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第4巻　資本論の分析(3)

序章　総過程＝分肢的生産関係の分析とその一層の展開

下平尾　勲

1　本巻の課題

本巻は、商品生産に内在する矛盾、および資本・賃労働関係という資本主義的生産様式のもっとも基本的な矛盾の分析を試みた第二巻、さらに、資本・賃労働関係の動態化を再生産＝蓄積論の次元で考察した第三巻を受けて、『資本論』の論理の全体系的な把握を、資本主義的生産の内的運動法則とその現象形態との関連において明らかにするとともに、変革主体の形成と階級闘争、国家の意義を解明しようとしたものである。同時に経済学批判体系全体にかかわる諸論点を明確にし、現代資本主義の危機の揚棄の理論的展望をめざす第五巻にたいして基礎理論的な光をあてようとしたものである。

2　第一編の課題

『資本論』第二巻および第三巻を編集したエンゲルスが述べているように、第三巻執筆中に、マルクスは重い病気にかかった。そのため、第三巻については、「全くただ一つのしかも非常に脱漏の多い最初の

草稿があっただけである。……先へ進むほど、仕上げがますますスケッチ的で脱漏の多いものとなり、研究の途上にあらわれる付随的論点にかんする余論がますます多くなり、……生れ出るままに書き下された思想を表現する文章がますます長く、錯雑したものとなった」（KⅢ、青木版一七、大月版七ページ）だけであった。エンゲルスのほんとにねばり強い努力の結果、『資本論』第三巻は、今日われわれの繙きうる姿をとっているが、しかし理解されがたい難点も残された。問題の所在や解決の方法が簡単な章句や引用文でもって示唆的に語られている箇所も少なくないからである。ある章の中で述べられたことと、他の章で説かれていることとが、論理的・歴史的に首尾一貫して、綿密に描かれているとは思われないところもあり、読者を悩ましてきた。

第一編においては、資本主義的生産様式の内的法則の展開として具体的な現象形態を解明することが重要な課題である。

まず、剰余価値の利潤範疇への展開の各段階の諸契機と構造とを究明し、さらに、価値と市場価値、生産価格と市場生産価格との関連について分析し、競争の意味を明らかにしようとしたのが、Ⅰ「内的諸矛盾の隠蔽としての価格・利潤」であった。ここでは、『剰余価値学説史』段階での「資本と利潤」の性格規定から、現行『資本論』のそれへの推移を手がかりとして、利潤論が資本制的生産の内的諸矛盾の外化＝隠蔽だとする視角がどのようにして確立されてきたか、そこでの競争把握の関係がどのように位置づけられるようになったか、が解明される。

つぎに、利潤論および競争論を受けて、資本の蓄積＝現実資本の運動との関連において信用制度の形成、発展、限界を論じたのが、Ⅱ「資本の蓄積と信用制度」であった。『資本論』第三巻第五編は、基本的には、利子つき資本の本質と運動とを論述したものであるが、その中で信用の本質、発生、作用、限界等に関す

る諸規定が断片的、暗示的に与えられている。これらの章句を整理して信用の諸規定を資本の蓄積との関係において把握し、信用の意義と限界とを解明したものである。

Ⅲ「土地所有の独占と絶対地代」は、絶対地代論の理解に関連して、「土地所有の独占」をいかに把握するかを研究したものである。利潤論が産業資本家間の競争を通じての剰余価値の分配論であり、利子・信用論は産業資本家と貨幣資本家との間での競争を媒介としてのそれの分配論であるとすれば、地代論においては、産業資本家と土地所有者との間における剰余価値の分配が問題となる。剰余価値生産という資本主義的生産様式の内的法則が資本と土地所有との関係において現象したのが、地代であるが、そして地代は差額地代と絶対地代に区分されるが、絶対地代を成立させる土地所有の独占の権能発揮の場を農産物市場からは相対的に独自な位置にある「土地市場」に求めて論述されている。その場合、絶対地代は、最劣等地の個別的価値と生産価格の差額として現実に存在すると、とらえてはならないという観点がもちこまれる。

補論1「土地所有の史的展開」は、日本近世の幕藩体制期を対象として、地主の土地把握を、生産力の発展に照応しての領主による新たな再編成の観点から論じたものである。幕藩制国家における石高制の成立は、中世末期にとくに顕在化しつつあった重層的土地所有・生産関係を、領主―小農の関係に一元化しようとしたものとして意義づけられるが、そのことにより、従来の諸関係は農民間の階層性の矛盾として村落内部に封じこめられることとなった。この場合の重層的諸関係の矛盾は、歴史過程ではどのような形態であらわれるか。生産力論と権力論とを統一的に把握してはじめて、内的矛盾の解決として所有・生産関係の史的解明が可能だとされる。

Ⅳ「『資本論』における世界市場論」は、マルクスの世界市場認識の論理構造を、『資本論』を中心とす

るその理論的著作の叙述を素材に重層的に把握しようとしたものである。それは、㈠商品関係の普遍的展開の場として、㈡資本主義的生産様式の展開の場として、㈢新たな生産様式の創出の場として、重層的にとらえられる。㈠の分析は世界貨幣を、㈡は経済学批判体系プラン一～五までの項を、㈢はプランの最終項目「世界市場（恐慌）」を、それぞれ念頭におかれている、このような世界市場の重層的把握が、資本主義的生産様式の歴史とその内的展開＝矛盾の外化とを総括的に把握する思惟の様式に対応するという。つまり資本主義的生産様式は、世界市場を前提として発生し、世界市場とともに発展し、世界市場の限界の中で自己の矛盾を露呈するという意味で、この章は、内的矛盾の展開の総括的地位が与えられている。

3　第二編の課題

階級闘争および国家の諸規定となると、内容的にも、形式的にも、マルクス自体のまとまった叙述はない。われわれは、断片的、暗示的に残されたマルクスの章句から手がかりをつかまねばならない。これらの諸問題の分析に本格的にとりくむとなると、研究者の多くは、とつぜん峻険な一大山脈に遭遇するおもいをいだくであろう。研究対象自体が具体的、現実的、複雑であるために、理解はいっそう困難となり、綿密な叙述もむずかしい。

だが科学的研究をめざすかぎり、難解だという理由で、こうした研究をさけることはできない。マルクスの叙述のように、われわれもまた、資本主義的生産関係を抽象的なものから具体的なものへ、原理的なものから現実的なものへ歩むことによって、理論を具体化し、内容豊富化するとともに、『資本論』からより上向した、経済学批判体系全体の見通しにかかわる論点をとりあげてゆかねばならない。

まず、階級闘争においては、変革主体がいかに形成されるかが問題である。V「資本主義的な生産と蓄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.